はじまりと終わりの

ラスフーリニフフ

ヤマダヒフミ

はじまりと終わりのラスコーリニコフ

この物語を真摯に読む者は、恐ろしい経験をするだろう。それはまるで、未来の自分が目の前にいて運動しているかのような幻覚である。・・・ラスコーリニコフは、全てが終わった所から始めた。そしてあの恐ろしい殺人を行ったのである。・・・ところが、それが物語の始まりなのである。ドストエフスキーの恐ろしさは、ここにある。我々が死を越えるほどの絶望を体験していない時、おそらく人類ーー我々は、まだあのラスコーリニコフのスタート地点にすらたどり着いてない。だとすれば、我々はやがて誰かに向かって、あの斧を振り上げたりはしないだろうかーーー?。・・・自分は常識人だから、そんな事は絶対にしない、自分は幸福な市民だ、収入もある、という奇特な方ももちろんいるだろう。だが、ドストエフスキーはぬかりなく、書いている。この物語の最後で主人公は一つの夢を見る。そこでは、めいめいの人間が自分が正しいと信じて他人を害する、という病にかかっており、それによって人類は滅亡する。・・・さて、現代のこの世界は、そんな夢の中の世界に酷似していないだろうか。我々は自分が正しいと信じる所から始めていないだろうか?・・・我々の誰が、あの恐ろしい病にかかっていないと断言できるだろうか?・・・そしてその最初の罹患患者が、ラスコーリニコフという、超人に憧れた凡人であった。そして歴史は繰り返す。ドストエフスキーの死後に、あのスターリンや、ヒトラーといった、自分を絶対にねじ曲げる事のできない奇妙な超人が現れ、あらゆるものを殺戮の海に叩き込んだのだ。

私は何の為にこの批評を書いているか、自分でも知らない。ラスコーリニコフもまた、自分の自意識からの逃走しようとして、あの恐ろしい殺人を行ったのだが、結局、その自意識から逃れられなかった。だが、彼は贖罪の途中で、何ものかを見た。(ラストの遊牧民の風景を見る場面の事。)そして彼は救われた訳だが、それが何であるのか、作者は具体的には書いていない。それは、書けないものなのだ。だから、書かなかった。ここに一つの終点があるのだが、これはまた始まりである。ラスコーリニコフは、自分の罪を悔いる事、自分が殺人という罪を犯した事に対して、人間的に悔悟する事を覚えたのではない。(結果的にそうなったとしても。)そうではなく、彼ははじめて、精緻な頭脳によって、完璧を画した自分の理論が、現実に、世界に、自然に敗北した事を直覚したのだった。・・・そして、この青年の、彼自身の敗北は、同時に彼の第一の勝利であるはずである。何故なら、そこから彼の人生が始まるから。

スターリニズムが、資本主義に敗北し、崩壊した。それは、ドストエフスキーが知る所ではなかったものの、ドストエフスキーが正に予言した通りの出来事だったと僕は思う。彼は、そうなる事を正しく指摘していた。ラプラスの悪魔。あの、完全なる計算、頭脳ではじき出された正義が、それ以外のものによって滅びる様を、彼は確かに直感して、描いた。・・・そして、現在、それと全く同じ事が起こってはいないだろうか。人は、現実主義者の名をかたると共に、最も効率的に現実を蹂躙する。頭脳で考えられただけの正義が世界を這いずり回り、世界と人々の救

済を謳いながら、世界を荒らし、壊滅させる。今また世界はそのように動き出している。だとすると、今また新しいドストエフスキーが我々には必要なのだろうか。最初に絶望するからこそ、真の希望を持つに至る、そうした人間が、我々には欠けているのだろうか?